

第35回母子保健奨励賞受賞者の横顔

盛島 利文氏

(52歳) 医師・青森県



平成9年より乳幼児の運動発達の診察や療育相談に取り組む。月齢に応じた運動発達のチェックや指導のほか、母子の将来像を見据えたアドバイスや医療福祉資源の利用についての具体的な情報提供を行うなど、家族への助言に力を入れた。保健師を対象とした乳幼児の運動発達の研修会で講師も務め、また、地域保健と医療の連携についてのネットワーク会議を行うなど、人材育成にも大きな役割を果たし地域の母子保健向上に貢献した。

関口 雅美氏

(50歳) 助産師・群馬県



母子をとりまく社会環境の急速な変化が進むなか、平成9年より助産院に勤務するかたわら母子訪問事業や助産師会の活動を開始、地域に密着した母子保健活動を多方面で展開する。行政との連携も積極的に行い、地域の母子保健事業の発展に寄与した。また、助産師が「いのちの大切さ」を児童・保護者・教職員に伝える出前講座事業においても中心的な役割を果たし、その先駆的な活動で成熟した地域づくりに大きく貢献した。

高鼻 美智子氏

(54歳) 保健師・岩手県



昭和56年岩泉町に奉職。乳幼児死亡率の高さから保健指導の重要性を感じ、妊産婦指導や育児指導に力を注いだ。妊娠期からお互いの顔が見える信頼関係を構築するとともに産後も健診や離乳食教室を通して関わる機会を設け、就学までつながるきめ細かな育児支援を行った。また町に産婦人科医がいないことから、妊産婦の健康診査に際した通院費の補助金助成制度の創設に取り組むなどし、地域の母子保健ネットワークの要として活躍した。

木村 弘美氏

(50歳) 保育士・埼玉県



昭和58年より保育士として施設保育に携わる一方で、地域に向けた活動にも力を注ぐ。平成9年からは子育て支援センターで地域福祉を担当し、子育てに困難を抱える母親を支援するための事業の充実に努める。ともに感じ、ともに気づき、ともに考える体験を重視した支援を行い、地域全体の子育て力向上に貢献した。家庭訪問型子育て支援「ホームスタートかぞ」の立ち上げにおいても中心的役割を担い、その手腕が高く評価されている。

加藤 道子氏

(47歳) 助産師・宮城県



病院勤務後、地元である旧古川市で地域に根ざした活動を開始。地域医療機関と密な連携を図りながら、助産・看護に取り組んだ。平成14年に助産院を開業してからは新生児訪問や育児相談、母乳ケア、小・中学校での性教育など多岐にわたり活動。妊娠～育児を継続的に見守ることを重視した支援を展開している。また東日本大震災に際しては、震災後の早期から母子に寄り添う支援を行い、その姿勢は地域母子保健関係者の模範となった。

土屋 裕子氏

(50歳) 保健師・千葉県



専門の療育機関が少ない横芝光町で、発達障害児支援に意欲的に取り組む。療育教室を実施して子どもの特性に合った対応についての指導を行い、親子のストレスを軽減し二次障害の予防に寄与したほか、5歳児健診の開始に際しては専門スタッフの確保や地域の関係機関との連携づくりにも尽力。また事後指導検討会の実施や就学後の継続的な支援体制の構築などにも努め、発達に気配りのある児と家族へのサポートに大きな力を発揮した。

伊藤 充也氏

(49歳) 歯科医師・山形県



平成5年に大蔵村唯一の医療機関である村立診療所に奉職。乳幼児のむし歯の多さから予防活動に着目し、歯科保健指導や定期健診、フッ化物歯面塗布等に積極的に取り組む。保護者アンケートなどから現状を分析しニーズに即した住民参加型の活動を行い、その結果3歳児のう歯有病率が改善するなど大きな効果を上げている。母子保健のみならず学校保健、高齢者健康支援にも幅広く取り組み地域の健康を支え、住民の厚い信頼を得た。

吉川 由起子氏

(52歳) 助産師・石川県



病院勤務などを経て平成13年より石川県で開業助産師としての活動を開始する。県の助成で助産師会が実施する「入院療養児家族相談事業」においてはスタート時から事業全般に関わり、平成16年度からは事業リーダーとして支援体制の確立と事業の推進に大きく寄与した。母乳哺育支援を中心とした訪問活動や子育てサロン事業など多様な母子保健活動も展開。「傾聴」の姿勢で心身両面から母親への支援を行うなど、地域への功績は大きい。

高橋 美知子氏

(53歳) 助産師・栃木県



昭和60年より助産師として母子保健活動に従事。多様な問題を抱えるハイリスク妊婦を目の当たりにしたことから、地域の関係職種が協働で支援するシステムの整備に力を注いだ。妊産婦のハイリスクスクリーニングシートの作成など早期から継続的な支援体制を構築したことにより、虐待予防の大きな一助となった。また中高生に対して命の大切さを伝える思春期教育にも熱心に取り組み、受講生から高い評価を得るなど多大な貢献があった。

秋山 公代氏

(51歳) 保健師・山梨県



昭和59年旧石和町(現笛吹市)に奉職。自閉傾向をもつ子とその母親たちに出会ったことをきっかけとし、平成5年に個別相談事業「コア教室」を立ち上げる。臨床発達心理士と連携した丁寧な支援を行うことで、母子関係の改善を図り大きな成果をあげた。平成20年からは母子保健担当リーダーとして活躍。発達障害者支援のシステムづくりを目指した「発達支援連携会議」を立ち上げ、より総合的な支援ができるように尽力した。

第36回（平成26年度）応募要領

表彰対象 55歳未満の者であって都道府県知事・政令市市長・特別区区长から推薦のあった個人で、母子保健事業に5年以上従事し、地域に密着した活動で著しい功績を挙げているとともに、今後も引き続き母子保健事業で大いに活躍が期待できる者を対象とする。

ただし、国・都道府県・政令市・特別区の本庁の現職員および現職の大学教授・准教授は除くものとする。

表彰式典 平成26年11月19日（予定）

応募先 （公財）母子衛生研究会

母子保健功労顕彰会本部事務局

〒101-8983 東京都千代田区外神田2-18-7

電話 03-4334-1151（代）

藤原 鏡子氏

（53歳）助産師・大阪府



大阪府技術吏員を経て平成5年より地域の助産所に勤務。同時に新生児訪問指導など地域の母子保健活動を開始する。平成11年からは開業助産師として多くの赤ちゃんの誕生に関わり、さらに平成16年には有床助産所を開設、地域における妊娠・出産・育児の拠点のひとつとなる。往診など個別の対応で未受診妊婦の発生を防いでいるほか、知識と経験に基づいた指導で妊婦との信頼関係を構築し育児不安を軽減するなど、大きな功績があった。

松崎 美穂子氏

（54歳）NPO 法人代表・徳島県



県外から嫁ぎ子育てに悩んだとき仲間助けられた自身の体験を元に、県内初の子育てサークルを立ち上げ親子の出会いと交流の場を積極的に提供する。平成5年には「徳島こそだてネットワークくすのき」を結成し子育てサークル同士の交流を図り、地域の子育て環境の向上に貢献した。平成14年からは、誰でも気軽に立ち寄れる子育てひろば事業を展開。助産師や歯科医師、臨床心理士と連携した相談活動などを行い好評を得ている。

勝吉 恵美子氏

（47歳）臨床心理士・宮崎県



平成9年より心理相談員として保健所に勤務し、未熟児および乳幼児健診時に観察が必要とされた児と母親への支援を行った。発達相談が市町村に移行してからは3歳6か月健診や5歳児健康相談、フォロー教室等での心理相談に従事。わかりやすい説明と細やかな対応から相談者の信頼が厚い。また、平成19年度からは宮崎県女性専門相談センター「スマイル」で幅広い世代の心理相談に対応しており、今後さらなる活躍が期待される。

小関 聡氏

（54歳）医師・横浜市



開業医師として地域の産婦人科医療に携わったかわら、横浜市の周産期医療体制の整備に積極的に取り組む。とくに産科セミナーオープンシステムの確立に寄与し、モデルケースを作り上げた。また平成7年からは日本産婦人科医会の各種委員会の一員として日本における周産期医療の実態調査および対策・提言などを中心となって行い、産科医不足を社会に訴えるなど精力的に活動、安心安全な出産環境づくりに大きく貢献している。

太田 百合子氏

（52歳）管理栄養士・渋谷区



昭和60年より「こどもの城」において、全国に先駆けて肥満児指導に取り組む。医学・栄養・運動・心理分野と連携した肥満改善教室を中心となって運営、視察の受け入れや講演など情報発信にも力を注いだ。また乳幼児期の食生活支援についても研鑽を積み、母親の仲間づくりを推進しながら食事の悩みを相談できる子育て広場事業を展開した。メディアを通じた栄養指導活動も行い、全国の支援者や保護者の啓発に大きな役割を果たした。

母子保健奨励賞の応募から決定、表彰式典までの日程（予定）

